

フィヒテにおける存在論

判田 哲也

「思惟のうちで語ることは、沈黙のままである筈のものを語り得ないという場面を通して初めて、その語ることの有体において安らうであろう」。この文章は私たちの時代における形而上学の語り手、M・ハイデガーの『思惟の経験から』に収められているものです。そしてこの文章には、私たちがこれから取り上げるフィヒテの存在論の中の最重要概念、絶対者が成立する地平を顕現させる内容が込められています。そもそも認識のアプリオリな構造を、認識者である私たちの悟性能力のうちに求めんとするフィヒテが、認識の点ではもちろん、実践の点でも有限である私たちを超えた絶対者をどうして問題にし得るのか。彼の存在論を取り扱おうとする際、まずその点が疑問として、私たちに生じてきますが、この疑問に対する解明の糸口となるのがハイデガーの引用文なのです。もっともこの引用文の理解のために、ハイデガーの著作『森の道』に収められている『ヘーゲルの経験概念』という論文の中で、ハイデガーの思惟の事柄における経験了解を私たちは知っておかなくてはなりません。つまり彼によれば、思惟における経験の本質的契機は、経験内の意識にとって、新しい真実の対象が生じるという事実にある。しかし新しいといってもその際での対象は、けっして表象のための向う側に存在するものとしては考えられず、今はまだ真理ではないといった意味での古い対象に対して、意識の真理が生じるものとしてである。したがって

この場合、意識にとって真理の事柄は意識の向う側からやってくるという様なものではなく、意識の内において意識がまさに意識たらんとする純粹に内的なビルドゥング、形成において生起する事柄であるといっているのです。そしてこのような事柄こそ、フィヒテがいう絶対者が成立する地平、事行を表現するものでもありません。以上に示したことは、私たちが通常経験する内容に比べ、確かに異種的な感じを与えます。それは、私たちの普段の経験がすでに形成された思惟を媒介として、私たちの意識のうちに固定化されるのに対して、思惟そのものの経験は、意識を可能にするために固定化する働き自体を、さらに意識する必要があるからなのです。このような経験の反省によって知識学は成立します。しかしそれだからと言って知識学が普段の私たちの生活に与って無関係というわけではありません。思惟の事柄における経験は、それ以外の一切の生活様式をその根底から支える性質のものであるといつてさへ過言ではないのです。フィヒテの絶対者についての考えが主題となる一八〇四年の『知識学』が、「現代の生活は、単に歴史を追うような形において象徴的に過ぎず、現実の生活に到ることが極めて少ない」といった文章ではじめられているのもそのためです。

さて、古くはバルメニデスの叙事詩の中にある一節、「同一のものが考えられ得もし、また存在し得もする」といった表現にも窺えるように、今日では大きく二分される認識論と存在論が取り扱おうとする、認識するものと認識されるものの緊張関係は、フィヒテの活きた思想の動脈ともいうべきものです。そしてフィヒテによれば、思惟と存在はともに彼が光と呼ぶところのものの下

に成立するものです。それではこのように思惟と存在を可能にする光とは何でしょうか。フィヒテがかつて哲学と呼ばれるものに対して与えた、新たな名称、知識学がその考察の対象とするのはさまざまな知識を知識ならしめる知識、知識一般です。そしてこのような知識一般としての知識を、フィヒテはまた知識を眼に喩え、知識一般を眼の澄明さといっています。この際、知識一般において重要な点は、知識一般についての知識は、他の知識と違って知識とそれの対象が別ではなく、いわば知る働きを意識と、知られるものの存在が同一であるという点です。知識一般は意識と存在の關係において統一的であり、その意味では絶対的であって、その絶対的なものを基礎として、それに区別原理が入り込むことにより相対的な、それ以外の一切の知識が可能となります。つまり意識と存在に区別されている相対的知識は、知識の絶対的質としての同一性から直接に現れてきたものとして見て取れるということです。例えばテレビ機材についての知識や株についての知識は、それらの知識とそれらの知識が取り扱う対象が区別されるにも拘らず、それらがやはり知識である点においては同一なのです。フィヒテにとって知識とは、そのような知識一般との有機的ともいふべき連関を前提にして成立するのです。

さて先述の意識、あるいは思惟と存在を可能にする光とは、さまざまな知識においては知識一般が前提となっていることを私たちに知らせる明証性のことです。そして光の下での概念として呈示された意識と存在の關係は、知識一般の定立が論証によるものではなく明証性にもとづくことから、論証的には不可解な存在とそれを表現することで論証的には否定される概念として考えられ

るのです。それにしてもこのように概念としての意識も存在も可能にする光が、全く絶対的なもの、つまり絶対者であるかというところではありません。何故なら明証性を表現する光も、表現されたもの、つまり概念の形で思惟する者に問題とされる以上、この時点では光も存在に対立する相対的知識ではないからです。しかし光の知識においては、光が知識一般としての絶対性を担う面も含まれており、フィヒテはこの二面性を、光の内的実存と外的実存という言葉でもって表現します。そして光の相対的な面である外的現存に関しては、それが内的現存としての光の肖像であると考えることによって、光のもつ二面性を、光の活動現象における相互貫通として把握します。また、このような現象形態をもつ光の概念は、他の概念と区別され始原的概念と呼ばれます。始原的概念においてはその内容、模写されたものと、光そのものは他の諸概念と違い、両者が光の本質としてともに光にとっての不可欠の契機なのです。そしてフィヒテは二つの契機が各々、一面的に捉えられることによって實在論と觀念論の立場が取られるとしたのです。したがって光が絶対者として示される立場は、両者の契機を綜合的に含んだものでなくてはなりません。それは存在を思惟することが出来る存在者、人間が活動することにおいて存在が同時に活動者に対して、存在の本質として開示する事態であり、したがって人間は存在と不可分の存在者なのです。換言すれば、人間は自己自身を存在の生命的現象において直接的に思惟の事柄として経験するのです。有限である人間が絶対者を語り得るのは、フィヒテによればそのためなのです。